

人狼王子 外伝

国境の町

カパクリーから東にはまともな道がない。トルクメニスタンの大部分を占めるカラクム砂漠の砂が広がっているだけだった。カラクムとは「黒い砂」という意味だが、黒いというより灰色がかつた淡いベージュ色だった。

時化にあった小舟のように揺れる車で夜通し走って「ボーダータウン」、国境の町に着いたのは、砂漠の夜明けとほぼ同時だった。荷物を下ろし、粗末な監視小屋にいる青い肌の人造人間に許可証を見せた。背の低いその人造人間は無表情で、「ウイズ・ナギーブ」のサインが入ったクリーム色の紙を端から端まで目を通して見る。

その間、ぼくは今から行くこうとしている国境の町の事を考えていた。

ようやくその文書を読み終えた人造人間から紙を返してもらって、上着のポケットに畳んで入れた。監視小屋の裏でタバコに火を付けた。しばらく禁煙しなければならなかったからだ。バイラマリーという比較のおおきな街で買い込んだ

トルクメニスタン製の紙巻きタバコだった。一口吸っただけで吐きそうになった。だが、我慢して根元まで吸った。ニコチンが摂取できればそれでいいのだ。

一時間後、ぼくは国境の町の入り口に立っていた。まるでイタリア製の西部劇映画の主人公のように。看板も何も無い入り口の下に人造人間が立っていた。まるで人形のように無表情だった。彼は、ボーダータウンと砂漠を区切るサンリ避けの金網を内側に向かって開けて、ぼくを招き入れた。

ぼくは四角いゲートをくぐり抜けた。

国境の町が、目の前に広がっていた。

ぼくは国境の町に撒かれていた赤茶色の小砂利をさくさくと踏みしめながら、町の奥へ奥へと進んでいった。

四角いというだけで、なんの特徴もない建物が並んでいる。町のどこからでも、町を取り囲んでいる金網が見えた。まるで巨大な鳥かごの中にいるようだ。

朝だというのに、人造人間以外の姿を見かけなかった。彼らは一様に青っぽい顔をして、のそのそと荷物を運んでいた。

記憶をたどって目的の場所に行ってみると、はるばる砂漠

を横切って会いに来た人物は引越していった。犬の糞のような匂いがする家の中から出てきた大柄な男が、あいつはだいぶ前に町の西の外れに行ったんだ、と歯の無い口で言った。その男は目が白く薄い膜で覆われていた。ぼくがその家の入り口から声をかけると、身体全体の間接をきしませるようにぎくしゃくと歩いてきた。

こいつは、もういちど死にかけているのかもしれない。そう思ったが、礼を言い、その家を後にした。数メートル歩いたところで振り返った。さっきまで会話していた男は勾配のついた鉄板屋根の家の前で、途方に暮れたようにぼくを見つめていた。

ぼくは国境の町にある唯一の商店街をゆつくりと歩きはじめた。ここまで来たら、急ぐ必要はどこにもない。彼はけっしてこの町の外に出ることはないのだから。

ぼくは雑貨屋の前を通り過ぎた。ちらと店内に視線をやる、入り口にブックスタンドがあり、雑誌が置かれていた。ぼくは店内に入り、いちばん手前の大判の写真雑誌を手にとった。トルコ語の雑誌だった。数年前にイランで発行されたものようだった。

店主はやはり青い人造人間だった。四角い積み木のような

顔をしていた。

ぼくは、その人造人間に向かって、この雑誌は買えるのかと尋ねた。

するとその積み木は首を振って、よそものには売れないきまりになっているのだ、と感情の無い声で答えた。

ぼくは雑誌をスタンドに戻し、店の外に出た。

初めて人造人間以外の人間が歩いているのが目に入った。ひどく腰の曲がった老人だった。マツチ棒のような角材を杖代わりに使っていた。ぼくはその老人を追い越した。

突然、何か聞き覚えのない言葉で、その老人がぼくに話しかけた。ぼくは振り向いた。そのとたん、老人は手にした角材でぼくに殴りかかってきた。ぜんぜん力がこもっていないか。痛くはなかつたから右手で顔を庇いながら、左手でその木を掴んだ。

老人はまた大きな声を上げた。後ろから雑貨屋で店番をしていた人造人間がその老人を羽交い締めにした。老人は口の端に泡を浮かべてわめきながらもがいた。

通りの反対側から、もう一人の人造人間が近づいてきた。黒い棒のようなものを手にしていた。ぼくは後ずさった。棒を持った人造人間は、その老人の背中をばんばんと叩き始め

た。さほど力を込めたふうに見えないのに、老人は打擲が加えられるたびに大袈裟なうめき声を上げるのだった。

はやく行つてください、と人造人間の雑貨屋の店主がぼくに声をかけたので、ぼくは背を向けて足早にその場を立ち去った。その間も老人の声は続いていた。

だいぶ歩いたところで振り返った。二人の青い人間が老人を引きずって、どこかに連れ去っていた。

ぼくは、目的の人物の家を探して回った。以前住んでいた家に新しく住んでいた男が言った「町の西」とは、ボーダータウンでもっとも人口密度の高い地域だった。様々な木造の集合住宅が所狭しと立ち並んでいる。ぼくは行き交うひとびとのほとんど全員に話しかけ、その男の所在を尋ねまくった。女性も子供の姿もまったくない。町の住人は皆初老以上の男たちばかりだった。

たったひとりでこの町を造った「ソーサラー・ボトキン」が司法取引の際にそんな条件を付けたという逸話が伝わっているのを、ぼくは思い出した。だが、ぼくはそれを単なる伝説だと思う。

たんに復活を請われた人物が男性ばかりだったからだ。ぼく

くはそう信じている。死刑囚の90パーセント以上は男性なのだ。考えれば、だれだってごく当たり前の話であることに気がつくだろう。

まるで死体安置所を思わせる薄暗い床屋で、ひとりの人造人間が目的の人物の居所を正確に知っていた。ぼくは、その、鋏を持った青白い人造人間に簡単な地図を書いてもらった。床屋の中で白い前掛けをかけたまま、坊主頭の老人がひとり眠っていた。すぐそばでぼくと人造人間が会話しているのに目覚める気配がなかった。死んでいるのかもしれないと思っただけだった。

とにかく、その紙切れをたよりに数分間歩いた。徐々に暑さが増していく。砂を含んだ一陣の風がさつと吹いて目の前のブリキの屋根でばらばらと音を立てた。どこか遠くでガサガサという耳障りな音がする。町を取り囲む金網にサソリか、砂漠ガメが触れた音かもしれない。

そう思うと、ふいに心細くなって、ぼくは早足になった。その家は、まるで物置のようだった。戸は無かった。ぼくは暗い家の中を覗き込んだ。

二つの濁った鈍く光る目が暗闇からぼくを見つめ返して

いた。

知性というものが感じられない鈍い目の光りに見覚えがあった。

ぼくは大きく息を吸い込み、「こんにちは。…なんて呼べばいい？」と言った。

変わった挨拶だが、苦肉の策だった。本名で呼んでしまい、ひどく興奮させた事があったからだだった。

その老人は小さな丸椅子に座ったまま、黙ってぼくの姿を頭のでっぺんからつま先までじろじろと見た。

「おぼえていないのかい？…去年も11月に来たんだが」ぼくは言ってみた。

老人は答えない。三十秒近くも待って、もしかして人違いだろうかと思いついたところ、その老人は異様に白くて四角い歯が並んだ口を開いた。

「…あなたはタバコを吸ったな？」老人が言った。

ぼくは一瞬考えて、正直に、ああ、と答えた。タバコの匂いがついていないはずはないし、おそらくカマをかけているのだらうと思っただけ、否定する方が機嫌を損ねるような気がしたのだ。

「よく吸うのか？」

「一日に…三十本くらいだね」ぼくは答えた。

老人は曖昧にうなずいた。

ぼくはその男がそれこそよちよち歩きの頃からタバコを吸っているのを知っていた。彼を溺愛していた母親が吸わせていたのだ。後にアルコール中毒がもとで死んだ彼女は、おなじように息子に酒も吞ませていた。

「…おれにはタバコの記憶だけがあるんだ…。執行の前、神父が出て行った後吸った記憶が」

老人は、そう言って短く刈り込んだ白髪頭に手をやった。「執行」とは「死刑執行」のことだ。この人物からあっさり自分自身の「死刑」に関する言葉が出てくることにぼくは軽い違和感をおぼえた。ひよつとしたら彼らにとって、いや少なくともこの男にとって、それは、その「死」は、たいした問題ではないのかもしれない。

「実際は吸っていないのにな…」年老いた男は付け加えるようにつぶやいた。

「…よかったら、また話をしてくれないか？」ぼくは言った。「話…？ なんの話だ？」

「…その、あなたが、その、いろいろとやったことについて」ぼくはそう切り出して、目の前の男の濁った目を覗き込んだ。

「…いろいろやった…？…ああ。ああ…殺しのことか？」
「そうだ」ぼくはうなずいた。今日の機嫌はどうなのだろう？怒りだしたらまた一年、ぼくは待たなければならぬのだ。

「…そんなことをおれから聞いてどうするつもりなんだ…？」

「…小説を書くんだ。ぼくはあんたをモデルにして小説を書いているんだ」

「…小説？…おまえは本を書くひとなのか？」

「ああ、そうだ。まだ本になったことはないんだがね。あんたのことを書いて、出版社に持って行って本にしてもらおうと思ってるんだ」去年も同じ話をしたな、と思いながら、ぼくは言った。

「…おれを本にするのか。…おれが本になるんだな」

「ああ、まだ出るときまったわけじゃないが、いっばい話してくれたら面白い本にしてみせるよ」ぼくは言った。

このもと殺人鬼は、自己顕示欲の塊なのだ。本になって、もしかすると永遠に自分の名が記憶されるかもしれないという可能性に飛びつくだろうとぼくはふんでいた。

老人は口をつぐんで、遠くを見る目をした。ぼくは警戒し

ながら振り返った。何も無い。国境の町を取り囲む金網が砂漠の太陽を背に黒くそびえているだけだった。

「なにが聞きたい…？」老人は低い声で言った。

「…じつは、五番目の事件までは聞いてるんだよ。なにか、付け加えることがなければ、六番目の殺人のことを聞きたいんだ」

ラヴァーズ・レイン

「六番目…？恋人たちの道でいちやついてるガキどもを撃ち殺したやつか？」老人は言った。

「いや、たぶんちがう。それは六人目ということだろ？ぼくが言ってるのは、六番目。魔女殺しだよ。一市の遊園地の近くだ」ぼくはある街の名前を出した。ひどい事件だった。水晶占いで生計を立てている年老いた下級魔女をハンマーで殴り殺したのだ。その残虐な犯行のあと、目の前の老人は血の付いたハンマーで、地面におなじみのマークを描いていた。

ソディアップ

円の中に十字。獣帯のシンボルである。

「ああ。あれか」老人は何の感情もこもっていない声で言った。

「あれは、どうしたんだ？」ぼくは尋ねた。

「どうしたって…なにが」老人は玄関先に立っているぼくを見上げた。くぼんだ頬に赤い吹き出物ができていた。

「いや、どうしてあの魔女を殺したのか、という意味だよ」ぼくは言った。

その男は少しだけ考え込むような表情をした。

「…あの女が魔女だったなんて考えもなかったよ。金ぴかのアクセサリーをちやらちやらさせて歩いていって、ただの金持ちの豚にしか見えなかった」男はつぶやくように言った。

安っぽい偽物の宝石をつけた占い師の衣装のせいで、あの魔女はハンマーで頭を叩き割られたんだ、ぼくは思った。

「じゃ、当然、あの女性が分離主義者セセッションニストだとは知らなかったんだね…？」

「…：…なんだ、それ？」

ぼくはびっくりした。この連続殺人鬼は、自分を電気椅子に送り込むきっかけになった要因を、まったく知らないというのだ。

「魔法使いたちの中の派閥のようなものだ。魔法界と普通の

人間社会とを完全に分離すべきだという主張を持つてる。数はそんなに多くないが、発言力は大きい。犯罪捜査に魔法が使用されないのは、彼らの影響によるものだよ」

そこまで言うのと、その年老いた男は顔をしかめた。どうやら事の次第に気がついてたらしい。いや、たんに忘れていただけかもしれないのだが。

「あの魔女はそのグループのシンパだった」ぼくは言葉を続けた。「遊園地の中の粗末な占い小屋で得たわずかな収入の大部分を、彼らの総本山というべき中央アフリカに送金していたんだ」

「…あのクソどもめ」老人は吐き捨てるようにつぶやいた。「だから」ぼくはかまわず続けた。「あの魔女をあんたが殺したとき、魔法界は積極的に捜査に協力したんだ」

そうでなければ、警察側に魔法という武器が無ければ、あんたは逃げおおせていただろう。だが、その言葉をぼくは飲み込んだ。そこまで興奮させる必要はない。

「なるほどな…じゃ、別の女を殺ればよかったのだ」年老いた男は、朝食を、パンではなくオートミールにすればよかったといったげな、軽い調子で言った。

「だれでもよかったのか？」ぼくは言った。

「ああ、一つまえの『仕事』が、つまらない中年男だったから、こんどは女を殺るべきだとおもったのだ」

「仕事？」

「おれはそれをそう呼んでいるだけだ。……ところで、おれが死刑になって何年になる？」男は自分の誕生日をど忘れしてしまったかのように、ぼくを見上げて、そう尋ねた。

「十四年だ」ぼくは即座に教えてやった。

「もう、そんなになるのかね」その男はつぶやいた。

その男なりに感慨めいたものがあるのだろうか。ぼくは考え込んだ。

マリア・グリゴリエヴナ・ボトキン、通称「ボトキン夫人」という、傑出した『ネクロマンサー』によって甦った彼らには、死の瞬間の記憶というものがあるのだろうか？

だが、ぼくはその質問は、この町を最後に訪れるときまで取っておこうと思っていた。少なくとも自分からしゃべりだすまでは、訊かないでおこうと思った。

ぼくは七番目の殺人の事を聞いた。被害者は二人。目の前の男は4番目の殺人のときと同じように、手製の布の覆面をして老夫婦が住む家に押し入り、食事中の二人を殺したのだ

った。今度の凶器は散弾銃だった。

「……こんどは銃の番だと思ったんだよ。警察の阿呆どもが違う犯人だと思いこんでしまったらいけないので、床に大きくおれの徴を描いてきた」

丸に十字。黄道十二宮のシンボルである。

太陽が西に傾きつつあった。ぼくは老人が椅子を勧めてくれないので、家の前にある舗道の縁石に腰掛けていた。

死刑執行の後に甦って生き続けている死刑囚の老人は、終始、上機嫌だった。上機嫌で、必死で命乞いをする老夫婦をどういふふうに殺したのか、ぼくに語り続けた。ぼくは淡々とした口調で語られる、残酷な殺人の様子を聞き流しながら、目の前の男の事を考えていた。

そうだ。魔法界は捜査に協力した。哀れな老夫婦が殺された現場の過去を、査読魔法が得意な魔女たちが徹底的に読んだのだ。この男は、床に広がった被害者の血をうっかりと踏んでいた。その足跡の記憶から、聞き込み捜査や科学捜査の何倍もの早さで、犯人が特定されたのだ。この老人が指名手配されるのにそれから一日とかからなかったのである。

その事件が起きたのは、次の日だった。

ぼくは軽く息を吸い込んで、さりげなく言った。

「…八番目の事件のことは？」

老人は片方の眉をつり上げた。

「八番目？ 八番目とはなんだ？ あの夫婦のつぎの仕事のことか？」

「そうだ」ぼく言った。

年老いた死刑執行済みの男は、シミだらけの長い首をかしげた。

「…記憶にないな…」男はつぶやいた。

「そうかもしれない。あんたは追われていた。追われていることを知っていた。だからひどく焦っていた。あんたは車に飛び乗って、何百マイルも走った。ある田舎町で、あんたは車を乗り捨てた。ガソリンが底をついていたし、魔女が上空をパトロールしているのが目に入ったからだ。夜の8時ごろだ。その日夕方から激しい雨が降っていた。…おぼえていないかい？」

年老いた男は、ぼくから視線を逸らして、乾いた砂漠の空を見上げた。ぼくも振り返ってくすんだ青い空を見上げた。太陽はようやく天頂に近くなっていた。

「…おもいだせない。ぜんぜん…」男は言った。

「まあいい。報道されていることを元に再現してみよう…。もし、なにか思い出したら言ってくれ」ぼくは言った。

「あんたはどしや降りの雨の中、歩き続けた…。やがて、街頭もない暗い通りに二軒の家が見えた。片方は大きく豪華で、片方は貧しげな家だった」

ぼくは話しながらその老人の顔色をうかがっていた。何の表情の変化も読み取ることができなかった。

「あんたは、最初、金持ちの家に侵入しようとした」ぼくは話を続けた。「あんたはその家の裏手に回り、地下室の入り口のあたりを物色した。武器を持っていなかったら、いつものようにドアを蹴破ったりしないで、音を立てずに忍び込むつもりだった。その家の住人を刃物かなにかで殺し、食い物を手に入れるつもりだったんだ」

ぼくは言葉を句切って、その年老いた男を見つめた。なんの反応もなかった。

「裏庭であんたががちゃがちゃやっている音は、雨音にかき消されていたはずだった。だが、突然、真っ暗だった二階の窓に明かりがついた」ぼくは老人の反応にかまわずしゃべり続けた。「そして、窓が開いた。雨が打ち付ける芝生の上が、

明るく照らされた。窓の中から小柄な人影が見えた。…なにも思い出さないか？」ぼくは念をおした。

「いや…、まったく思い出せない。…おれは、あの夫婦を殺したあとに捕まって死刑になったんじゃないのかね？」

「それが、違うんだ。あんたは、自分のやった八番目の事件を忘れてる」ぼくは言った。

そのとき、ボーダータウンを囲んでいる遠くの金網から耳障りな音が聞こえた。ぼくと老人は一緒にその方向を眺めていた。

「…あんたは金持ちの家の住人に気がつかれたと思って、あわてて裏庭から逃げ出した。あんたは二つの家が面している暗い通りにでた。顔を見られたような気がしていた。できればその金持ちの家に押し入りたかったが、あきらめた。その時、激しい雨の向こうから車のヘッドライトが近づいてくるのが目に入ったからだ。金持ちの家の隣に建っている小さな家の娘がボーイフレンドに送ってもらって、家に帰ってきたんだ」

ぼくはまた息を吸い込んだ。空気は、かすかに鉄の味がした。

「車は彼女の家の前で停車した。運転していた男性は、あんな

たが腰をかがめて運転席のドアの下に忍び寄るのに気がつかなかつた。雨音が激しかったし、娘とキスをしていたからだ」

「あんたは」ぼくは続けた。「運転手側のドアをそっと開けて、その青年の首を両腕で巻くようにして思い切り捻り上げた。あんたは、それほど力を入れずに人間の首の骨を折る方法を知っていたんだ。…違うかい？」ぼくは言った。

そのとき、埃っぽい空の彼方から、金属的なうなり声が響いてきた。

ぼくは振り返って、その音のする方向を見た。障壁の彼方から、巨大な円盤が砂漠の空を滑るようにゆっくりと飛んでくるのが見えた。それは、中に浮かんだ真鍮の油虫のように見えた。楕円形の黒い胴体に、昆虫の肢を思わせるアンテナのようなものが突き出ていた。

虹が見えた。宙に浮かんでいるその機械の下部に、虹が弧を描いていた。

雨の時間なのだ。

去年もぼくはこの時間まで、この男と話していた。

背後に並ぶ死者たちの家々からドアが開けられるいくつ

ものの音が響いてきた。だらしなく、力無い蹠音が、さざ波のように打ち寄せてくるのを感じた。

ぼくは焦っていた。ひどく焦っていた。

「あんたは」ぼくはその執行済みの死刑囚に向き直った。

だが、その男はもはや、ぼくの言うことを聞いていなかった。立ち上がり、空に浮かんでいる大きな機械の下に向かってよろよろと歩き始めたのだ。

「なあ、思い出せないかい？」ぼくはその男の横に並んで言った。

その男は答えず、上空を見上げながらよろよろと進んでいく。町の人々がその男と同じように通りに出て空を見上げていた。何十人、何百人もの死者たちが、空を見上げていた。「ゾディアック：憶えていないのか？ あんたの裁判は世界中のひとが注目したじゃないか」ぼくは言った。

「…裁判のことはおぼえている。あれは面白かった…。それから先のことは憶えていない。あの魔女がおれにはくれなかった…」

「あの魔女？…」

「ロシア人の女だ。長ったらしい名前の、たしか…マリア・グリゴリーエヴナ」

ぼくは立ち止まった。

「…マリア・グリゴリーエヴナ・ボトキンなら、ふつう、魔女と呼ばれないんだ。彼女は『ネクロマンサー』、死者を復活させる魔術を使うものと呼ばれる」ぼくは言った。

その男は振り返った。その時、頭上に「降雨機」と呼ばれる巨大な機械がやってきた。日が陰った。細かいシャワーのような雨が振ってきた。雨粒が男の額にいくつもくつついていく。

「おい、おまえ、これが復活か！？…これが復活かというのか！」

その男はぼくに向かって叫んだ。そして、ぼくの目の前に指を突き立てていた。ぼくはその白い枯れ枝のような指を凝視した。雨がぼくの前髪から鼻に向かってしたり落ちてきた。

その指は奇妙にねじ曲がっていた。ひとさし指と中指は、何か皮膜のようなものでくつついている。瘤のような小指は小さくいびつに突き出ていた。

「おれは生きているとき、こんな手をしていなかった！ それに、こんな顔じゃなかったぞ！」その男はそう叫んだかとおもうと、次の瞬間、空にむけて大きく口を開けた。杖の先

を思わせるのだ仏が突き出ている。

その男は、口で雨水を受けているのだった。

その男のまわりで、何十人も国境の町の住人たちが口を開けて、黒い影に覆われた空を見上げていた。雨粒が、彼らの身体を濡らし、彼らの口に流れ込んでいる。

ぼくは、その異様な集団の中に呆然と立っていた。

「ゾディアック! : あんたはこんな雨の中、あの男女を殺つたんだろう?」

ぼくは叫んだ。雨が頬をつたい、口の中に流れ込んだ。頭のでっぺんから雨音が聞こえてくる。

「だから、女も、あんたが殺したんだろう? : おもいだせよ」
ぼくはもう一度叫んだ。

「: 男は殺した。: 思い出した。あれは急な仕事だったから、忘れていた」

その男は、口の端からたまった雨水を垂らしながらそう言った。

「女は? : 女はどうやって殺したんだ?」

ぼくは叫んだ。去年と同じように。

その男は去年と同じ台詞をしゃべった。

「女: : ? 女は逃げた: : 。あんたが一番よく知ってるんじゃないか?」

ぼくは思わず獣帯のシンボルを持つ男の胸ぐらを掴んでいた。頭の中にも激しい雨が降っているような気がした。

「女を殺したんだろ? ゾディアック? 絞殺したうえに、女の両目を潰して」

その老人は、ぼくの顔を冷たく見つめた。

「: おれは、そんなことはやっていない。: やつたことにしたいのか?」

「くそつ」ぼくは、その男の首を絞めた。雨粒が頭の中ではらばらと音を立てていた。

「いいかげんにしろ」ゾディアック、獣帯の男は、小さな声でつぶやいた。

その瞬間、腹に鋭い痛みを感じた。腰のあたりから、喉にかけて、何かが駆け上ってくる感じがした。ぼくは視線を落とした。

鋭い二等辺三角形のガラスの破片が、ぼくの腹に突き刺さっていた。赤黒い何かが来ていたシャツにシミを作っている。

「おれは: : いつも一気に殺すんだ。死体をいじつたりしない」

その男は、つぶやくように言って、その破片に手をかけて、ぼくの下腹部から胸にかけて切り裂くように上にむかってしゃくり上げた。

「あああ…」

ぼくは大事なものを落としたようにうめき声を上げた。

恐ろしい老人に背を向けて、雨の中、よろよろと逃げようとした。

国境の町の砂利道の上に、ぼくの血だまりが広がっていく。死者たちが、ぼくの行く手をじゃましているかのようだった。彼らは一様に口を開け、天の降雨機を見上げている。

縦に切り裂かれた腹から、重たい何かが下に向かって垂れ下がるうとしていた。ぼくは両手でそれが落ちないように押さえながら、千鳥足で国境の町を去ろうとしていた。

「…ばかめ」

ぼくの背後から、十四年前に死刑になった男の声が出た。

国境の町の出口に向かって、ぼくは歩いてきた。降雨機の雨を降らせる範囲を越えてしまったので、雨は止んでいた。

町は静まりかえっていた。来るときにみた床屋や雑貨屋が見えた。

ぼくは小便をぎりぎりまで我慢している小学生のようなへつぴり腰で町の外へと向かっていた。びっくり箱の中の芋虫のように勢いよく飛び出そうとしている内臓を押さえながら。

なにか、薄く、白いものが目の前を覆っていた。

ぼくは、意識を失いかけていた。まっぴらだった。町の中で倒れるなんて、ごめんだ。だが、ぼくは前のめりに倒れた。

……

緑色と黄色の光が明滅していた。

ぼくは薄目を開けた。皺だらけの手のひらの上できらきらと光を放つゴルフボール大の球体が見えた。

携帯用直感発振体である。

「いきなり身体を起こそうとするんじゃない…しばらく眠ってな」老女の声が頭の上から降ってきた。ぼくは目を閉じた。

次に目を開けたとき、頭を動かす事ができたので、横を向

いて、カーキ色のテントの窓から見える国境の町、ボーダータウンを眺めた。

それは、半径十数メートルの、金網に囲まれたテニスコートのように見えた。金網に何匹かの砂漠ガメが張り付いているのが見えた。金網から迷い出た人間を食おうとしているように見えた。

真鍮でできたゴキブリのような降雨機が、砂の上に着陸していた。普通の背丈をした人造人間ふたりが、それを担いで車に積み込もうとしていた。培養液を補充するためだった。

ぼくは身体を起こした。テントの中に魔女はいなかった。テントから出て、ボーダータウンに向かって歩き始めた。砂漠の夕日に照らされて、時計の長針のような黒く長い影が町に向かって伸びていた。

ぼくはボーダータウンを見下ろしていた。それはまるで箱庭だった。テemapパークにあるようなミニチュアサイズの町並みが下に広がっていた。小さな、一般的なホームクルスよりも小振りな人造人間と「死者」たちが、ちよこまかと歩いていた。

「のぞきこむんじゃない！」

背後から老いた女性の声がした。

「ああ」

ぼくは立ち止まり、振り返った。目の前にトルクメニスタン人の老婆が立っていた。

「町から離れるんだ。あの子らは影を怖がるかもしれない」

老女はそう言ってテントに向かって歩き始めた。ぼくは彼女の後について歩いた。

呼び止めるのが遅かったよ。ぼくはその女の曲がった背中に向かって、心の中で言った。

見てしまったのだ。町の入り口近くで、黒く長い物が腹から飛び出たホームクルスの死体を、別の青いホームクルスが運んでいるのを。

ぼくたちはテントの中に入った。

「…何年来たって、同じだよ」女は言った。

「そのぶん、金を払うんだから、いいじゃないか」ぼくはそう言ってバッグの中から米ドル紙幣の束を取り出した。

「金の問題じゃない…。あんたの事を思って、言ってるんだよ」

「じゃ、これはいらぬのか？」

「…そういう意味じゃない」その魔女はぼくからひったくるようにして札束を受け取り、スカートポケットに無造作につっこんだ。

「いつかあんたは国境の町から帰ってこられなくなる、と言いたいんだよ」

ぼくは、荷造りを始めながら、あの町に永遠にとらわれた魂の事を考えた。何も浮かばなかった。白い靄のようなものが頭の中を覆っているような気がした。

「そうならないように、来年もたのむよ」ぼくは言った。

ぼくはまた砂漠を夜通し走った。ときれときれの悪夢を見た。断片的すぎて、ちっとも怖くなかった。その夢はきまつて、こうだ。子供の姿をしたぼくが窓を開ける。暗い庭から真っ白く歪んだ顔が、ぼくを見上げている。

バイラマリーという町で朝飯を食い、そして吐いた。

汽車の時間まで駅の周辺で待っているときに、市場で葡萄を買った。トルコ語の新聞にくるまれた葡萄を持って、ぼくは空腹のまま汽車に乗った。

カスピ海に向かう気の遠くなるような鉄道の旅だった。客

車は不潔で混んでいた。

カラクム運河にさしかかるころ、汽車の窓の外に、魔女が箒に乗って飛んでいるのが見えた。臭くて狭い客車に乗っている乗客はみな陽光の中で黒い蝶のように自由に空を舞っている魔女を、暗い目で見上げていたのだ。

ぼくは新聞紙を開き、黒くて大きな葡萄の一粒を房からもいだ。

隣に座ったイラン人らしき中年男がじろじろとぼくの指先を見ていた。気になって指がすべった。ぷしゅ。葡萄の粒が潰れ、果汁が飛び散った。ぼくの袖に黒っぽい紫のシミが出来た。

一瞬、眼窩に突き刺さった親指の根元から透明の液体があふれ出る光景が脳裏に浮かんだ。ぼくはその潰れた葡萄の一粒を口の中にねじ込んだ。

なんの味もしなかった。

窓の外では運河と砂漠と貧しい町並みが混じり合って溶けいく。永遠に続くかと思われる単調な風景だった。ぼくはもう一粒の葡萄を指でつまむ。ぷしゅ。

イランの男はぼくへの興味を失い、所在なげに天井の粗末な電灯を見上げている。ぷしゅ。

どこかで赤ん坊が泣いている。ふしゆ。
薄暗い客車の椅子に座って、ぼくは、その眼球のような葡萄を潰しつぶけた。

完

参考文献 「現代殺人の解剖」 コリン・ウィルソン著 中村保男訳 河出文庫